

第二節 太平洋戦争下の市民生活

太平洋戦争と 翼賛政治 日本は政府や軍部は、中国の抵抗が強いのは、アメリカやイギリスが東南アジア經由で中国に援助物資を送っているからだと考えた。そのため、援助ルートを絶つとともに、この地域に勢力を

ひろげて軍需物資を確保しようとした。昭和十五年（一九四〇）、フランスがドイツに敗れたのをみて、「大東亜共栄圏」の建設を唱えてフランス領インドシナ北部に進駐、翌十六年ソ連と中立条約を結んでインドシナ南部にも軍を進めた。これに対し、アメリカ・イギリス・オランダなどが日本への経済制裁を強め、アメリカは中国やインドシナからの日本軍の撤退を要求した。日本は十六年十二月八日、ハワイの真珠湾にあるアメリカ基地を奇襲し、太平洋戦争に突入した。日本はアメリカ・イギリスに宣戦し、日中戦争もふくめて「大東亜戦争」と名づけた（太平洋戦争はアジア・太平洋戦争とも呼ばれる）。

国内の緊張はいちだんと高まり、翼賛政治の確立が急がれた。大政翼賛会が政府の単なる協力機関になって活力を失ったのをみて、十七年一月、大政翼賛会の実戦部隊として大日本翼賛壮年団（翼壮）が結成された。二十一歳以上の青壮年の「同志的組織」である点が強調された。

奈良市翼賛壮年団（市翼壮）は、同年二月十一日の紀元節に結成式を挙行してつぎのような宣誓を行った。

（前略）謹ンデ大詔ヲ奉戴シ、万民翼賛ノ本旨ニ則リ、如何ナル困苦欠乏ニモ堪ヘ、国策ニ信倚シ冷静且ツ沈着、克ク職務ヲ奉行シ、必勝ノ信念ト決死ノ覚悟トヲ以テ一切ヲ君国ニ捧ゲ、断ジテ時難ヲ克服シ、以テ聖旨ニ応ヘ奉ランコトヲ期ス

（「奈良市議社だより」昭和十七年二月十五日付）

その後市翼壮は、各学区ごとに結成することに組織を変更するが、同年十二月六日に発足した奈良市佐保翼賛壮年団は、「大政翼賛運動ニ挺身スルヲ以テ」目的とし、佐保国民学校に本部を置いた。『昭和十七年事務報告書』によれば、

町内会、在郷軍人会、其ノ他諸団体ヨリ選抜推薦セラレタル優秀者ヲ以テ組織シ翼賛運動ニ挺身シツツアリ。各校区毎ニ支団ヲ設置ス、総数約一千名、十二月八日大詔渙発^{（かきげ）}一周年ヲ記念スベク暁天大会ヲ春日神社社前ニ於テ開催セリとある。

十七年四月三十日に衆議院の総選挙^{（翼賛選挙）}_{（呼ばれた）}が行われるが、政府は選挙に先立って翼賛政治体制協議会を組織し、政府・軍部に協力する候補者を推薦、公然と選挙干渉を行った。推薦候補者三八一人が当選^{（内、翼賛社員四〇人、非推薦当選八五人）}、彼らを中心に翼賛政治会がつくられて事実上の一国一党が実現した。奈良県では定員五人のうち、四人の推薦候補者が当選、奈良市在住の当選者三人のうち二人が推薦候補者であった。

奈良市でも、その年六月四日市会議員の選挙が行われた。選挙に先立ち、候補者の推薦母体として翼賛市会建設協議会が結成され^{（前市長松井貞太郎貴族院議員、植村武一衆議院議員、町内会長会から推された二〇四人の中から三六人を選んで推薦候補者とした。非推薦の自由立候補者も一九人を数え、選挙戦は「未曾有の混戦」となったが推薦候補者の当選二九人、非推薦の当選七人という結果であった。六月十四日、翼賛市会建設協議会の松井・植村・関三委員の招待で新議員の懇談会が開かれ、議員全員で翼賛市政研究会を結成することになった。こうして一市一党の体制が実現、名実ともに翼賛市会の成立をみたのであった。}

配給生活 太平洋戦争に入って、生活物資の不足はいっそう深刻化した。すでに米をはじめ砂糖・マッチ・と食糧難 木炭・酒・地下足袋・ゴム靴などが配給制になっていたが^{（第一節4）}、昭和十七年（一九四二）の一月か

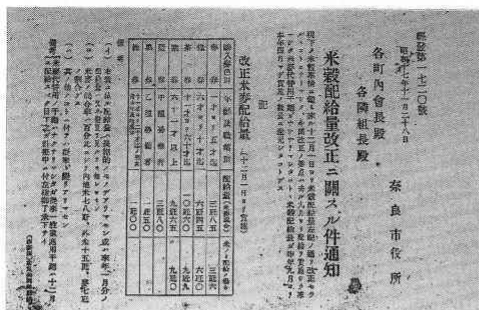
表15 配給物資と実施年月

昭和18年12月現在調

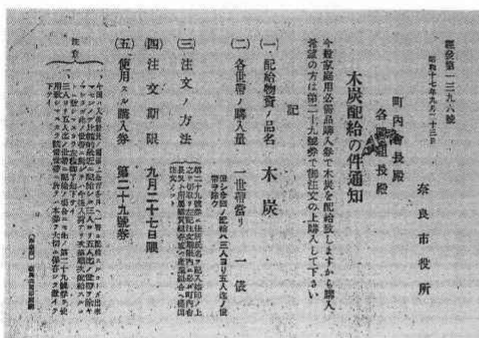
種 別	切符実施年月日	種 別	切符実施年月日	種 別	切符実施年月日
地下足袋	昭和15. ^年 1 ^月	石 鹼	昭和17. ^年 5 ^月	米代替用ばれいしょ	昭和18. ^年 6 ^月
育児用乳製品	6	生 菓 子	〃	煎 蚕 豆	7
学童用靴下	〃	学童用ゴム底靴	8	塩 大 豆	〃
学 童 服	〃	家庭用乾菓子	〃	商工省指定洋傘	〃
砂 糖	7	中 入 綿	9	湯 葉	〃
衛 生 綿	8	片 栗 粉	10	フライビンズ	8
マ ッ チ	12	豆 炭	11	煮 豆	9
木 炭	〃	煉 炭	〃	寒 天	〃
糯 米	〃	た ど ん	〃	竹 輪	〃
米	昭和16. 3	薪	12	食 酢	10
食 用 油	〃	味 噌	〃	晒 わ か め	〃
小 麦 粉	4	醬 油	〃	生 う ど ん	〃
清 酒	〃	大 豆	〃	天 婦 羅	〃
脱 脂 綿	7	蒲 鉾	〃	ミ カ ワ 竈	〃
干 麵	9	鯉 節	昭和18. 1	縫 付 布 靴	〃
石 油	10	乾 海 苔	2	製 麩	〃
子 供 用 菓 子	11	バ ケ ッ	〃	軽 金 属 類	11
豆 腐	12	削 節	〃	和 傘	〃
油 揚	〃	長 切 昆 布	〃	田 麩	〃
塩	昭和17. 1	ロ ー ソ ク	3	米代替用甘藷	〃
衣 料 切 符	2	麦 酒	〃	蔬菜登録制配給	〃
鶏 卵	3	味 付 海 苔	5	鮮魚登録制配給	12
業務用小麦粉	〃	蚊 帳	6	哺乳用乳首	〃
凍 豆 腐	4	だ し 雑 魚	〃	病人用氷枕	〃
釘・針金	〃	ト ロ ロ 昆 布	〃	子供用下駄台	〃

『昭和十八年事務報告書及財産表』から作成。

第五章 戦争と奈良



米穀配給の通知状



木炭配給の通知状

ら二月にかけて味噌・醤油・塩などが配給制になり、二月から衣類が点数切符制になり、やがては石鹼や煙草から野菜や魚などの生鮮食料品も配給の対象とされる。これを奈良市についてみると表15のとおりだが、実施年月は六大都市などの場合と多少のズレがある。それによっても、十八年末にはほとんどすべての日常生活物資が配給制になっていたことがうかがえる。

戦局が不利に傾きはじめて十八年ごろからは、生産の低下で供給が減り、予定の配給量が維持できなくなった。野菜や魚の生鮮食料品をはじめとして

表16 奈良市の米・麦の配給量(1か月分)

年齢	昭和17.5.1								昭和17.9.1		昭和17.12.1		昭和18.7.1		昭和19.5.1	
	米	麦	米	麦	米	麦	米	小麦	年齢	米	年齢	米	年齢	米	年齢	米
1～5歳	3.6	0.4	3.3	0.5	3.6	0.25	3.5	0.3	1～5歳	3.6 (1日120g)	6, 7歳	6.0 (1日200g)	8～10歳	8.1 (1日270g)	11～20歳	12.0 (1日400g)
6～10歳	6.0	0.7	5.5	0.8	6.0	0.45	5.8	0.4	21～60歳	9.9 (1日330g)	60歳以上	9.0 (1日300g)				
11～60歳	9.9	1.1	9.1	1.3	9.9	0.7	9.6	0.5								
61歳以上	9.0	1.0	8.3	1.1	9.0	0.65	8.7	0.5								

春日野町有文書・宮武家文書・水原家文書・東向北町有文書による。

日常生活物資の配給量が少量かつ不規則になっていった。衣料品などは、当初大人一人につき一年間で一〇〇点（（郡では八〇点））だった配給切符が、十九年には三〇歳以上は四〇点、三〇歳以下は五〇点の割当点数に削られた。主食（米）の配給は、大人一人一日二合三勺（（約三））が基準だったが、雑穀の主食代替による「総合配給制」が本格的に実施され、麦やいも類・小麦粉・トウモロコシなどが米と差引で配給されるようになった。精白による目減りを防ぐため白米も禁止され（（七分搗き））、二十年七月からは大人一人一日当り二合一勺（（約三））になる。

食糧危機が深刻化するにともない、食糧の買出しに近隣の農村へ出かけたり、空地を開墾して野菜やいもを作った。『朝日新聞』によれば、舟橋町から下流の佐保川の堤防や富雄川の河筋がなかなかよく開墾されており（（奈良版五朔））、横領町の約四〇〇坪の競馬場跡地に近隣町村の隣組員が相寄って野菜や麦・さつまいもなどを作り、野菜で四〜五万貫、さつまいもで約一三万円の収穫をあげたという（（同十九年十月））。また平城宮跡にそばを栽培する計画もあったという（（同十八年八月））。各学校でも運動場を開墾してさつまいもなどの栽培をすすめた。また、奈良市でも十九年四月から寺社の空闲地利用運動をすすめるし、翌二十年三月には春日野運動場を市民に貸付けて開墾させることにしている。

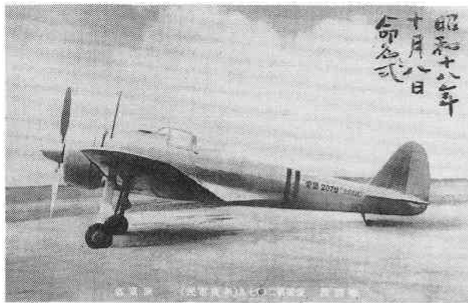
米や生活物資を手に入れるため闇取引がさかんになるが、闇価格が高騰して、公定価格の値上げと相まって国民生活を破壊した。参考のため、大阪の闇価格をみると、表17のとおりである。

そのうえ、ひきつづき国債の割当がくるし、貯蓄も強制された。十八年に

表17 昭和19年上期における大阪の闇価格

品種	単位	公定価格	闇価格
配給精米	1 升	円 銭 .45	円 銭 15.00
砂糖	1 斤 (<small>600グラム</small>)	.40	18.00
鶏卵	1 個	.065	.50
牛肉	100 匁 (<small>1匁3.75グラム</small>)	1.60	8.00
里芋	100 匁	.085	.25
鰻	100 匁	.70	1.00

山中恒『暮らしの中の太平洋戦争』（岩波新書）による。



「奈良市民号」(宮武テラス氏蔵)

は、戦闘機「奈良市民号」二機の献納も割当てられた。目標額一七万円、各町内会へ割当てるとともに特別寄付をつのったところ、一九万八千五百九十九円九角九銭も集まって、七月八日つぎのように献納、しばらくして命名式が行われた。

種別	機数	金額	献金先	命名式	式場
艦上戦闘機	一機	八万円	津海軍人事部	九月十二日	奈良県公会堂
陸上戦闘機	一機	一〇万円	大阪師団恤兵部	十月八日	鼓阪国民学校

なお、残金は県大和号献納金に一万五〇〇〇円、海軍恤兵部献納会に二〇〇〇円、式典その他諸費に一五八四円九角九銭をあてたという。

——こうして国民は、「欲ほしがりません、勝つまでは」(十七年十一月)、大人も子ども展望のない耐乏生活を続けねばならなかったのである。

苦難の日々 東寺林町に在住の本多道枝さんが、太平洋戦争中の思い出を綴った一文(奈良女子大学附属中学校中野薫(後呂)を「忠一編」(忠一編)「父母が語る戦争の歴史」所収)をつぎに掲げ、当時の市民生活をうかがっておくことにしよう。

日本が宣戦布告をした当時は、軍艦マーチと共に戦果が報せられ、やれ提灯行列だ、旗行列だと、お祝い気分浸っていたが、戦争が長びくにつれて、商店はしだいに店をしめ出し、物資が不足になり始めた。

配給制度がしかれ、延々と列をつくって、半日、長いときは一日もかかって、やっ

と買うことが出来るという有様だった。

それでも初めのころはお米もあったが、しだいに、じゃがいも・さつまいもが、米の代りに山と配給されるようになった。メリケン粉があるかと思うと、トウモロコシ・麦類はいうに及ばず、大豆・大豆粉まで主食として配給される。砂糖もたまには配給もあったが、たいてい赤ちゃんのある家だけに限られ、家で塩味のパンを作って、それで満足していたものだ。一月に一度のお菓子の配給でもあれば、子供と同じように親も食べたがった。

物資が不足するにつれて、闇ぐらがしだいに行われ、砂糖や炭などは途方もない値で売買された。

トン、トン、トンカカリと歌にも歌われた隣組が出来、防空に、配給に、応召兵士の見送りにと、銃後の守りに手をつなぎあって、外敵にむかったのもこの時だ。

主食の配給が少ない上に、副食物は無く、今では食べるのに不平をいうような、菜っ葉・玉葱の葉・さつまいものつるまで取りあうようにして買った。ならば粉のパンを一月に一度配給されたが、それでも喜んでもらいに行った。お金があっても買えない米・野菜類は、町の人達が村へ出かけ、百姓からこっそり分けてもらったりした。

国防婦人会がつくられたのもこの時代だった。母が町内婦人会長として、着物に白エプロン姿で応召兵士のある度毎に、祝辞を述べたり、傷病兵慰問に遠く外地にいる兵隊に慰問袋を送ったり、柳本の飛行場づくり、農繁期の手伝い、防空壕づくりなどをした。また、綿のいっばい入った防空頭巾をかぶり、筒袖・モンペ姿で班長として、男の人にまじって指揮をしている母の姿は今思い出すとおかしくなる。

連隊から衛生兵に来てもらって、包帯の巻き方、担架たんかのかき方を習ったり、極楽院ごくらくいんで軍事教練が始まり、藁人形わらこを竹槍で突く稽古げいこはその時は真剣そのものだった。

空襲警報のサイレンが鳴り響くと、真夏でも防空服に身を固め、それぞれの持ち場につく。家々には防火用水や砂を置き、

焼夷弾に備えた。洗濯物は敵の目標になると、急いで取り入れるし、夜は空襲警報のサイレンが鳴りひびくとすぐに電灯を消すので真暗闇となる。そのとき、泣く赤ちゃんをあやし、おびえる子供を力づけ防空壕に入る。湿気が鼻につき、水のたまってある所もある始末で、子どもはとてもしやがった。ラジオは一日中かけっぱなし、敵機の動勢に神経をとがらせた。食糧の大部分は防空壕に入れ、何時でもすぐ食べられるものを少し子供に持たせ、寝るときは枕元に置かせた。

大都市の人達がどンドン奈良に疎開して来られると、奈良でいるものでさえ、じっとしておられなくなり、家財を田原や押熊などの山中へ疎開させた。乗物にゆられゆられて、積んでいたタンスや長持などがこわれて困ったものだった。

空地という空地は、家庭菜園になったが、それでも食糧が足りないもので、屋根に大きな箱を置いて野菜を作っている所も方々にあった。

私の家でも家から約一里（千約四）もへだたった佐保丘陵の一角の荒地を買って開墾した。毎日土地を耕し種子を蒔き、肥しを車にのせて運ぶことは今ではとてできないことだ。開墾して一年間ほどは、ろくに収穫もなかったが、土地も肥えて作物がとれるようになると、知らぬまに誰かにとられてしまっただけでびっくりしたこともあった。けれどもこれで一家がどれほど助かったか分からない。食糧不足で町では犬猫の姿さえ見られなくなった。

薪は欠乏し、日を決めて、町内総出で奥山へ木を切り出しに行ったこともある。手あたりしだい木をもち、中には床板まではがしてもやす人もあった。

お風呂は又ものすごい有様で、人が湯船に一ぱいなのにまだその上へ上へと入るので、中に入っている人のひざの上に坐ったり、お湯を汲むすきもなく、入っているものは出ることもできず、けんかごしであった。風呂屋と親しいものは、物を持って行って、風呂のあく時間より先に入れてもらって、表で待っている人と悶着をおこした。人々はしだいに殺気立っていくのが感じられた。

金属の供出が叫ばれ、私達はナベ・カマ・バケツ・火鉢・鉄びんなどをこぞって供出した。どこそこのお寺の釣鐘つりかねが供出されたとか、だれその銅像もだと、毎日報ぜられ、戦争はいよいよ激化した。

毎日方々の都市が爆撃され、その悲惨な状況を新聞で見ると、何時かは自分達の上にもやって来るのだと、毎日びくびくして暮らしていた。広島・長崎に落された爆弾の恐ろしさ、ピカッ・ドンという間に何十万もの人が死んだそうだと人々は寄るとさわるとピカッ・ドンの恐ろしさを話しあつてふるえ上がった。

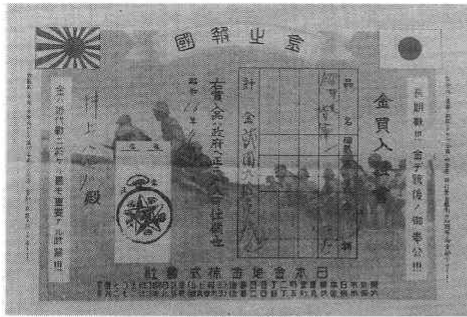
供 出 市内や近隣農村の農家には、
供出の負担が重くかかってき

た。昭和十七年（西三）からは、自家保有分を除く主要食糧を強制的に政府が買上げる強権供出が始った。市内の紀寺町では、昭和十八年度の割当二二九石を十二月十九日に完納する好成績をあげるが、これは、割当通知のあった日に常会を開いて供出完遂奉公隊をつくって各農家の指導監督にあたるとともに公平な割当をしたことにあるといい、東市村で十九年度の割当量二九八九石の完納の見込みが立ったのは、各大字毎に食糧増産突撃中隊を組織するとともに農

表18 辰市村大字東九条の農産物供出

常会の年月日	作物の種類	割当量 ※供出量
昭和17. 7. 8	稲藁	435貫
8. 8	軍用馬糧	30捆 (単位42kg) (11貫200匁)
9. 8	乾燥野菜	数量未定
昭和18. 2. 8	米	※完了分215石 (第2回供米) 申込量96石
6. 8	麦	198石
〃	蚕豆	11石7斗
8. 8	軍需用干草	15包 (187貫5)
9. 7	軍需用ズイキ	16貫 (各戸平均200匁)
9. 15	藁	
9. 21	馬糧	
11. 8	軍需用切干大根	40貫
昭和19. 1. 1	米 (供出完了)	
2. 16	藁	各組100貫
3. 23	同上	反当り35貫

「辰市村東九条常会議事録」(東九条町有文書)による。



金買入れ証書（北椿尾町有文書）

業者以外の家族は一日一合三勺という思い切った節米策を立てたおかげだという報道がある。しかし、供出割当量が多きに過ぎ、「供出のため前年のくいだめも次年のはやくいも全部使い果たして、村内の食糧事情は、非常な悪化を見ることになった」柳生村のようなどころもあった（『柳生の』）。

米や麦の供出のほか、いろいろのものが軍用に徴発された。すでに早く十三年に伏見村から軍事用梅干三六貫を供出（翌年に二八貫）、十八年一月富雄村に、米七七三六石、麦五二八石四斗のほか、軍馬用干草一九九捆（二捆四）、ばれいしよ六二〇〇貫、蚕豆四〇石、さつまいも一万六〇〇〇貫、軍用ズイキ一五貫、稲藁八貫、軍需用切干大根三七貫、木材七九九一石の供出割当があったことが知られる（富雄中町有文書）。十七年から十九年にかけての辰市村東九条の場合

は、およそ表18のとおりである。
また、二十年に入って伏見村には、軍用としてずいき・切干大根・乾燥よもぎ・すりぬか・稲藁などの供出が命じられている（『伏見の町史』）。

金属の回収
すでに昭和十三年（一九三〇）七月、県の主導で「どんな屑物でもお金になる／然も古金古鉄は国家に必要」として廢品回収

運動が始められていたが（『奈良新聞』七月六日）、翌十四年から「金集中運動」が始まった。五月十九日、市長から「民間ニ於テ所有スル金ヲ集中スルノ緊要ナルヲ認め、府県ヲ中心トシテ銀行信託会社等ニ委嘱シ、金ノ買上ヲ行フコトニ決定」した旨、各町総代宛に通達が出され、十五日から一週間で、表19に見られるように市民から金貨や金製品が寄せられている。市長以下市の職員も金貨・時計・指輪・帯止め・ネクタイピンなどを提供したという（『奈良新聞』昭和十四年六月十四日、六月十四日）。東市村

では、県の指示によって、金保有調査委員や金売却勧奨委員などを選任したことが知られる（鹿野園町）。

しかし、金属の回収が本格的に実施されるようになったのは、十六年八月金属回収令が公布され、翌十七年五月同令による強制譲渡命令が発動されてからである。古鉄や廢品にとどまらず、寺院の仏具や釣鐘をはじめ公共施設の鉄棚や記念像、家庭の金火鉢や金火箸・鉄びん・銅の花びんから蚊張の釣手にいたるまで、町内会を通じて継続的に回収が実施された。

十七年のはじめ、川上突抜町の金光教奈良教会から銅製灯笼二基の献納があり、東向北町からは溝蓋五七個（五三〇匁）と古釜一個（五〇匁）の供出があったことが知られるし、同年十一月には、橋本町にあった戦時物資活用協会に市民三〇余人から白金の腕時計や鎖のほか金銀の製品が寄せられたという。市内のポストも回収されて朱塗りの木製ポストにかえられた。また十八年一月には、本薬師町の

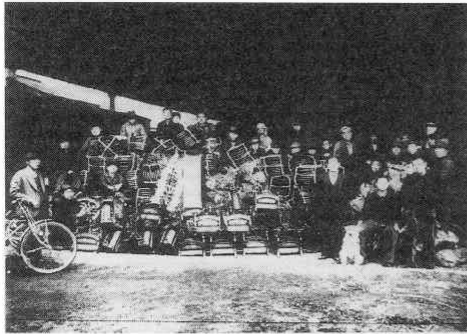
某氏が父の胸像を供出したことに感激した隣組の一五軒から、結婚記念の花器や祖先伝来の唐火鉢など二五〇点余りの供出があったとの報道もある。しかし市当局からの依頼に全面的に応じない向きもあったようで、十八年九月商店の看板や会社・銀行などのストープがかなり残っている。市職員が直接出向いて供出方を催促している。一般家庭でも、愛着が強くて手放さないものもあったとみられる（朝日新聞「奈良版昭和十七年一月十四日、十一月六日、十八年一月二十一日、二月七日、九月二十九日付、東向北町有文書」）。

十八年九月、あやめ池遊園地から遊覧施設が回収された。あやめ池遊園地は、時局に対応してあやめ池科学広苑

表19 金貨・金製品の売却（昭和14年5月15日～5月21日）

	金貨		金製品	
	件	円 銭	件	点
南都銀行本店	11	(1315.94)	86	229
三和銀行奈良支店	2	(101.01)	18	50
不動貯金奈良支店	1	(57.72)	14	30
勸銀奈良支店	2	(15.44)	3	9
大奈貯蓄本店	6	(225.09)	11	30
奈良信託会社	2	(86.88)	12	12
南都元興支店			3	12
南都手貝支店			2	5
計			149	337

『奈良新聞』昭和14年5月25日付から作成。



金属の供出 (藤井辰三氏蔵)

と改称、海軍科学館・航空科学館・落下傘塔などの施設をふやしていたのだが、天馬快走車・飛行塔・汽車・快速艇・巡り搖籃・鳥人金網などの施設を供出したのである。花園ラグビー場のスタンドの鉄傘も撤去・回収された。遊園地の一部は開墾されていも畑になったという(『近畿日本鉄道50年のあゆみ』、『伏見町史』一冊)。

春日神社からは、十八年以降日露戦争の戦利品の大砲や手水屋の鹿の像、幣殿東側の鹿の像その他雑具が供出された(『春日文化研究』)。もちろん市内や近郊農村の寺院や神社からも釣鐘その他の供出があった。東大寺では、十七年十一月に大仏殿の銅幡を供出したのをはじめ、二月堂の釣灯籠(五基^六)・手水鉢、知足院の吊鐘のほか諸堂の仏具などを供出した。いずれも慶長以降のもので、国宝に指定されていたものはすべて除外され、回収の対象となっ

た二月堂の金具は、急遽二月堂を特別保護建造物に指定してもらって難をまぬがれたという(『東大寺史研究所』)。

なお、樹木(とくに松材)の供出も命じられて春日奥山の伐木もすすめられたし、十九年には公園内につくられた県庁職員用の防空壕に奥山の松木が用いられたりした。翌二十年、軍部から公園の松木の供出を強要されたが、小田成就知事はその撤回を求め、公園の松を守ったという(『奈良公』)。

勤労報国隊

太平洋戦争の開始前後から、各種の団体や職域ごとに勤労報国隊が結成され、働き手の減った軍需工場や鉱山や農村

に赴いて労務に協力するようになった。昭和十八年(二四三)の「事務報告書」に載せられている事例を整理すると表20のとおりである(祝園部隊は、現在の京都府相楽郡精華町に所在、当時大阪陸軍砲兵工廠の管轄で強業に火薬をつめる作業にしていたという)。

『朝日新聞』(奈良版)によれば、このほかにも十八年一月県建築報国隊奈良支部が防空監視哨の施設充実のため勤労奉仕に赴き十一月十七日から県鮮魚介小売商奈良支部勤労報国隊五〇余人が市内の四鉄工所で作業に従事し、十二月には奈良市商業報国会の勤労報国隊二八人が、国鉄奈良駅で「戦闘帽・作業服に巻脚絆、国鉄輸送協力隊」の腕章も凛々しく、貨物の積み下し、小口貨物の集荷・配達などはげしい筋肉労働に奮戦した」ことが知られる。

近郊の農村には県から勤労報国隊員の割当があったようで、十八年十二月東市村に対し四人(他に補充)の長期隊員(一か月)の割当があり、各大字の区長宛一人ずつ選出するよう通達を出している。(鹿野園町。有文書)

なお、昭和十八年九月国内必勝勤労対策が閣議決定され、二五歳未満の未婚の女子を勤労挺身隊として動員することになり、未就職の女子中等学校卒業生を主な対象として女子勤労挺身隊の結成がすすめられた。出身学校を単位に編成される場合が多かったが、十八年十一月末の奈良市における女子勤労挺身隊の結成状況は表21のとおりで、割当人員を大きく下まわっていた。

十二月十九日、橿原建国会館で壮行式が行われ、出身学校別に工場へ出動した。市内の女学校の動員先は、女高

表20 国民勤労報国隊の出動状況 (昭和18年)

月	職種、団体、学校	人数	行先
1	奈良市和服裁縫組合	150	京都府祝園部隊
1	菓子小売商業組合	150	同上
	衣服更生組合		
	繊維小売商業組合		
5	食糧品小売商業組合	25	山口県沖ノ山炭坑
6	奈良市女子青年産業報 国隊	600	添上郡田原村、柳生村
	奈良市健民修練生	50	同上
	奈良女子師範学校生徒	50	同上
8	奈良製墨工業組合	75	京都府祝園部隊
10	奈良女子青年国民勤労 報国隊	150	堺市福助足袋株式会社 大阪鐘淵紡績会社淀川工場 南河内光洋精工株式会社国分工場

「昭和十八年事務報告書及財産表」(奈良市役所)より作成。

師附属高女が日本統麻株式会社（油阪）、育英高女が飛鳥井絹麻工場（佐紀）であった。翌十九年八月女子挺身勤労令が公布されて、未婚女子の動員が本格化する（『朝日新聞』奈良版昭和十八年十二月十二日付）。

翌十九年三月、県宗教団体連合会では鉾山勤労報国隊（二天）を結成して「山口県沖ノ山炭坑へ進軍、最初の僧侶部隊として注目」されたという（『朝日新聞』奈良版三月九日付）。奈良市でも各町内から計九〇人の鉾山勤労報国会を結成、三月二十一日壮行式を行って九州の三池炭坑に赴き約二か月の労働にしたがっているし、六月には大宮校区の大日本婦人会奈良支部の会員が輸送補助隊（ほう）を組織し、五日から日通奈良支店の滞貨一掃に乗り出し、七日からは下三条町の婦人会員も出動したことが知られる（同昭和十九年三月九日、二十一日、五月十四日、六月八日付）。とはいえこれらはたまたま管見に及んだものにとどまり、ほかにも勤労奉仕に動員された勤労報国隊は多かつたであろう（学校勤労報国隊に）。

表21 奈良市の女子勤労挺身隊結成状況

校名	割当人員	結成人員
女高師附属高女第1部	105人	23人
同 第2部	52	4
育英高女	157	30
奈良県全体	2003	888

奈良県「女子勤労挺身隊結成状況調、昭和18年11月3日現在」による。奈良市立高女はまだ卒業生を出していなかった。